

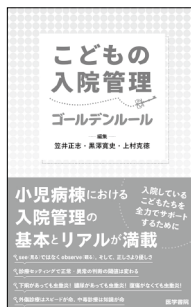
書
評

こどもの入院管理 ゴールデンルール

編：笠井 正志，黒澤 寛史，上村 克徳

B6 変型・頁 312 2024 年 01 月 定価：3,960 円(本体 3,600 円＋税 10%)
[ISBN978-4-260-05078-4] 医学書院刊

<評者> 児玉 和彦(医療法人明雅会こだま小児科理事長)



膨大な臨床からすくい取った 輝く英知をまとめたハンドブック

本書を編集・執筆された3人の医師とは長い付き合いであり、さまざまな薫陶を受けた。先生方の過去の名言と、本書におけるそれぞれのイチオシルールとともに、この良書『こどもの入院管理ゴールデンルール』を紹介したい。

①「紳士であれ」by 黒澤寛史先生。私が初期研修医のときに一緒に当直させていただいたことが何回もある。黒澤先生が「紳士であれ」とおっしゃったことはないが、その背中にはそう書いてあった。イチオシルールは「経静脈栄養なんていらない」(p.37)である。初期研修医、小児科専攻医の先生方にぜひ読み込んでいただきたい内容である。

②「Vision & hard Work (VW)」by 上村克徳先生。私が初めて小児病院で講演させていただいたのは上村師のお導きによるものであった。イチオシルールは、「外観から酸素化不全・換気不全を即座に推定しよう」(p.53)。小児科専門医やプライマリ・ケア医には気が付きが多い、気管支喘息についてのルールである。

③笠井正志先生には名言はない。存在そのものが名言である(のかもしれない)。イチオシルールは「細菌の1日が真菌の1週のイメージ」(p.263)。病棟を離れたベテラン医師こそ、原則に立ち返った診療をしなければと思わせる内容が多い。

近年、論文に書かれた結論を「金科玉条」として主張する老若男女とよく出会う。似たような言葉である「ゴールデンルール」には、「してほしいことをしてあ

げる」というニュアンスがある(「はじめに」より)。本書にちりばめられたルールは、鮮明に臨床現場の悩みを照らすものであるが、金科玉条ではない。読めばわかるが、執筆者たちが泥くさい臨床を積み重ねてきた経験の中に沈み込んだ一粒の砂金のような知恵である。

小児科病棟での「困った」に即座に役立つのは間違いないだけでなく、小児在宅医療での気管切開や胃瘻管理、あまり経験しない長期留置カテーテル(シャント含む)についてコンパクトに記述された稀有な本になっており、病院に紹介した後でどのような治療がなされるのかを知っておきたい、私のような開業小児科医も読むべきである。

本書は貴重なルールブックである。しかし「まえがき」に書かれているように、臨床に黄金律は存在しない。したがって、このトリセツは「本書の黄金律はシンプルでクリアですので、その根拠になった論文を探して勉強することをお勧めします」である。ルール(rule)には根拠(roots)がある。根っこが広がって初めて大木になる。No roots, No rule. 執筆者たちの「大木感」はこの表面に見えない深い根っこからきていることを読者は忘れてはならない。

最後に僭越ながらご指名ですので(?), 私からのゴールデンルールを1つ。「答えはベッドサイドにしかない」。本書をポケットに入れて、患者さんのところに行こう。